

ヘミングウェイの文体

佐藤英夫

1. はじめに

ヘミングウェイと言えば、G. Stein 女史の言う Lost Generation とその文学的代替物の Hard-boiled 式小説が引合いに出される。最初ヘミングウェイが抱いたものは、肉体的、心理的影響をもたらした世界第一次大戦の個人的な経験であった。言いかえれば、伝統的な価値に対する信仰の完全な喪失、暴力と死の認知、文学的には、事実、事件、言葉、そしていかなる心理的解釈をも却け、赤裸々に報道する傾向である。彼が信仰を失っている事は確かと言われるが、それを補ってバランスを得ているものは、人間の根本的欲望の作用、既ち食物、飲酒、性的充足に対する激しい欲望を真正直に述べたてる所にある。彼が人間存在に於ける死と暴力の役割を認知した事は、生活の強烈さを求める深い感情と結びつき、文体の赤裸々さが、瞬間の気分の創造に当って自然であるが、力強い数多くのシンボルに役立っているものである。

2. ヘミングウェイの本質的特徴

これは、1921年、つまり彼が23才の時パリで書かれた 'Up in Michigan' と言う初期の作品に見出される。All the time Jim was gone on the deer hunting trip Liz thought about him. It was awful while he was gone. She couldn't sleep well from thinking about him but she discovered it was fun to think about him too. and it seemed

as though everything would be all right when he came.¹⁾ (ジムは鹿狩りに行っているあいだ、リズはたえず彼のことを思いつづけていた。彼のいないあいだは、まったくたまらなかった。彼女は彼のことを考えるあまり、よく眠ることができなかったが、彼のことを考えるのは慰めにもなることに気づいた。……そして彼が来さえすれば、なにもかもすっかりよくなるように思えた。) Jim held her tight hard against the chair and she wanted it now and Jim whispered, 'Come on for a walk.'²⁾ (ジムは彼女を椅子のうしろにしっかりと抑えつけ、いまや彼女のほうでもそれを望み出し、とジムが「散歩に行こう」とささやいた。) の様にある所で働いている娘が自分のことなど眼中になさそうな若い男に秘かに思いをよせて、その男が数日間鹿狩りに出かけ、友達をつれて帰って来て酒をくみ交し、彼女を散歩に誘い出して情を通じてしまう。後の作品に数限りないバリエーションの中に繰返し現われてくるものが、この短編の中に基本的な主題として与えられている。つまり、男女の関係は本質的に、物理的な性質をもったものであると言う。そこには愛の口説はない、事実この2人の間には唯一の言葉もそれに類するものが見出せない。2人を結びつけた主な動機と言えば、2人の外ぼうであり、性的本能であって、特に娘の方などは自分自身の感情にすら気付いていないほどである。「狩り」という主題は肉体的な興奮を具象する行為、それ故に生きていると言う。又はるかに強烈な感情を与える行為をも意味している。「酔う」という主題は人間がたとえ残酷なものであっても、センチメンタルなものであっても、偽りのない真の本能に近づくものであるが故に、一段と真の自分に立ち帰れるように思える状態を指している。更に「人間行為の乖離」という主題は自分の相手の感情状態を何ら顧慮することなしに行為に移すことを指している。更に又ジェスチュアを与える事によって雰囲気形成するテクニックという問題がある。例えば男が欲望を果たし眠ってしまう。娘は自分のコートを脱ぎその男にかけて家路につく。ヘミングウェイの小説の多

くのものが、背景と雰囲気を変えながら同じ主題の上に組み立っている。既に狩猟では 'Father and Sons' に於いては純粹な快樂と興奮として、'The Short Happy Life of Francis Macomber' に於いては情熱、臆病、暴力となって現われている。人間の行動と感情の乖離は 'A Clean, Well-lighted Place' に於いて瞬間の気分として、又 'Old Man at the Bridge' では完全な孤独として現われている。一方他の要素が同様に深い意味をもつものは、死と言う課題が現われる物語に於いてである。あらゆる場面に展開される死の現象こそがヘミングウェイをしっかりと捕えているテーマである。何故なら、第一次世界大戦後の荒廃した時代の幻想の中で、人間の知識と信念の確実なものは死のみであって、この死が絶対的なものに映ったからである。この主題が題材の全面に滲み通り、それに象徴的意味深さを与えている短篇は 'The Snow of Kilimanjaro' である。

Africa was where he had been happiest in the good time of his life, so he had come out here to start again. They had made this safari with the minimum of comfort. There was no hardship; but there was no luxury……³⁾ (アフリカは彼の人生の盛りの時代に、彼が最も幸福に過した場所であった。だから彼は再出発する為にここへ来たのだった。彼はこの狩猟旅行をするのに、安楽を最小限度にまで切りつめて来た。艱難辛苦というほどのことはなかったが贅沢ということもなかった。……) のようにアフリカの沙漠で妻と共に狩猟を楽しんでいる間に '……. I don't see why that had to happen to your leg…….' 'I suppose what I did was to forget to put iodine on it when I first scratched it…… and started the gangrener.'⁴⁾ (なぜあなたの脚がこんなことになってしまったんだろう。……思うにおれがしたことと言えば、はじめ搔き傷をつくったときそれにヨードチンキをつけ忘れたことらしいな。……壊疽を起こしたんだ。) と傷がもとで破傷風を起し He had seen the world change; not just the events; although he had seen many of them

and had watched the people, but he had seen the subtler change and he could remember how the people were at different times. He had been in it and he had watched it and it was his duty to write of it; but now he never would.⁵⁾ (彼は世の中の変るのを見て来たのだ。ただ事件だけではない。事件は多くさん見て来たし、人間も観察してきたがしかし彼はもっと微妙な変化をも見逃さなかった。そして人間がいろいろな時にどんなふうであったかと思ひ出すことが出来た。彼はその只中にあって、それを観察して来たのだ。それについて書くことは彼の務めなのだ。しかしいまとなってはそれも出来ない。) の文章からわかるように、死の床に横たわりながら自分の生涯の色々な局面を思い起こし、最後に襲って来たせん妄状態の中で、自分が今や救助の飛行機に乗ってキリマンジャロに運ばれていくと想像する。そのある作家の物語である。ここで死が主要のテーマとして現われて来る事実を別にしても、バラバラなグループに区別される回想のエピソードを伴っている。これらのエピソードの中に、死は最初のうちは比較的遠く、何気ない要素として現われている。しかしそれが次第に主人公の個人的領分に接近し、常に新しい荒々しい残酷なものになる。Now in his mind he saw a railway station at Karagatch……. In Schrunz, on Christmas day,……. ……they had talked of the fighting on Pasubio and of the attack on Pertica and Asalone…

⁶⁾ …… (いま心の中では、カラガッチの駅を見ていた。——シュルンツではクリスマスの日——かれらはパスービオの戦闘のことや、ペルチカとアサローネの攻撃のことを語り合った。) のように彼はブルガリアとオーストリアの冬を回想し、そのどちらの土地の人々も殺害され、戦争経験を回想させるものである。更に又彼は、He thought about alone in Constantinople that time,……. That same night he left for Anatolia……

⁷⁾ (コンスタンチノーブルにひとりでやって来たことを考えた。——その日の夜、彼はアナトリアに向けて出立った。) のように戦争と殺戮の事を考

え、……and, screaming, had begged everyone to kill him.……. Nothing passed out Williamson until he gave him all his morphine tablets that he had always saved to use himself……⁸⁾ (彼はわめきながら、自分を殺してくれと皆んなに嘆願した。——彼は自分が使うために心がけてためておいたモルヒネの錠剤を全部与えてしまうまで、どうしてもウィリアムソンの苦痛は消えなかった。)

彼は少年が老人を殺した納屋のことを夢に見て、最後にひどい重傷を負った将校が殺してくれと頼んだ時、持っていたモルヒネを全部与えた時のいまわしい戦争のエピソードを思い起す。このような色々の回想の間に、ありふれた生活の断面に関する会話が挿入されている。死はまだ遠いと語られた直後に、このような回想は個人の死に関連するようになり、死期の迫った主人公に接近して来るわけである。人間のみならず、文中に出てくる動物にも死の連想感をもつようになる。最後には自然界に於ける死の季節、つまり冬と雪の連想が人間よりも遠く又間接的に現われている。しかしそれだけではそこに含まれた本質的なものの半分にすぎない。何故なら死のテーマは孤独にして神秘的なものか、あるいは生活の急激な発展のいづれかと関連する背景に於いて設定されているからである。アフリカ大陸、その最高峰の頂、回想の中に出てくる山々の背景は前者であり、後者は作家なる主人公の生活の中に展開され現われて来る。

ヘミングウェイの行動範囲は旅行、スポーツ、戦争参戦と巾広い経験から成っている。又恋もし、失恋もした。こうした回想もすべて、彼の創作の材料となっているのである。しかしそれらは死と直接的な並置の状態にあるもので、常に生と死の二重の謎として破壊の観念と結びついている。これがこの物語の深いテーマであり、題名と前書きの中にシンボルとして現われているものである。

3. 否定的構成

この否定的な面に関しては、‘The Sun Also Rises’の中に顕者に現われている。この物語は数名の若い男と一人の美人との話である。彼等は特に何をする事なく、フランスからスペインまで漫然と旅行をし、ギャンブルをし、喧嘩をし、恋をし、酒を飲み、闘牛見物をした時に彼等は物事に新しい興味を覚える。

闘牛は破壊と創造の二重性を意味し、動的な精力と暴力、陽気な優美さと危険、興奮と死の接近を示すものである。ヘミングウェイが当時、このような二重性のもつ積極的な価値に十分に気付いていなかったと言う事もありうる。しかし登場人物が皆、精神的に破綻を来たしている状態の中で、それ以外の価値の喪失を完全に意識しているという事は、この物語の目ざましい特徴と言っても過言ではない。男というものに貧欲な欲望を抱いている女主人公が、スペインの闘牛士に体を与える時、自分自らを牝犬と呼び、自分のかねての恋人をふりすてる事が出来ることを一種の道徳的行為であると決めつけている。

闘牛と言う主題がヘミングウェイの作品の中に幾度か取り上げられていることも意味深いものがある。‘The Capital of the World’と言う短篇に於いては、……and Enrique shouting, ‘Ay! Ay! Let me get it out!’ and Paco slipped forward on the chair the apron caoe still held, Enrique pulling on the chair as the knife turned in him, in him, Paco. The knife was out now and he sat on the floor in the widening warm pool.⁹⁾ (エンリーケは叫び声をあげた。「ウワッ! こりゃ! それを抜かなくちゃ! それを抜きとるんだ」。パコはエプロンのケープをまだひろげたまま、椅子のほうへよろよろ倒れかかった。エンリーケは椅子をひっぱったが、ナイフは彼の中へ、彼の中へ、パコの体内へ、突き刺さってゆく。やっとナイフが抜けた。彼は床の上に、だんだんひろがる温

かい血の池の中にしゃがみこんだ。)のようにレストランの若い給仕が闘牛をまねてふざけているうちに、闘牛にふんした相手を殺してしまう。

又 'The Undefeated' では闘牛場に於ける勝利と名声を得る為に奮闘する若い闘牛士が見るも無残な姿で敗北を喫する。しかし闘牛のあらゆる面を最も詳細に論じているものは 'Death in the Afternoon' に見出すことが出来る。この作品に特別の魅力を添えているものと言え、形式と儀式の問題と残酷と創造力の本質という問題がこの主題の複雑な性格の本質として現われるようにされている方法であり、そうした問題が、いかに処理され、解明されているかという事である。ここに於いても、作者分析に際して一つの案内役的役割を果たしているものは、演技と危険とに対する人間の心理反応を観察する際の徹底的な目的の正直さなのである。

'A Farewell to Arms' に於いては初期の段階の作者の、又 Lost Generation 全部の一般的な態度についての解明と言ったようなものが見受けられる。この小説は一般に戦争小説であり、その意味に於いても印象的なものの一つである。しかし決定的重要な問題は、戦争の恐怖、残虐と死の累積とが恋人の看護婦によせた主人公の激しい愛と産褥で死んでいく彼女の死によって浮彫りにされている所である。'The Sun Also Rises' の主人公と対照的に、この場合の主人公達は一般的に受け入れられている道徳の規準に従って、最善をつくしはするが故に、我々の同情をすっか引きつけてしまうのである。それにもかかわらず、彼等は自分達の落度のためにではなく、自然の成行きによって、最終的には完全に敗れ去ってしまうのである。それは全く決定論的態度なのであって、例えば、If people bring so much courage to this world the world has to kill them to break them, so of course it kills them. The world breaks every one and afterward many are strong at the broken places. But those that will not break it kills. It kills the very good and the very gentle and the very brave impartially.¹⁰⁾ (もし人々がこの世界に多大の勇気を

もちこめば、世界はそういう人達を痛めつけるために殺さなければならず、だからもちろん殺されてしまう。世界はすべての人間を痛めつけるが、のちには多くの人々がその痛めつけられた場所で、かえって強くなることもある。しかしどうしても痛めつけられない人間は、世界が殺してしまふ。世界はとても善良なもの、とても柔和なもの、とても勇敢なものを、わけへだてなく殺すのだ。)と表現されている所に見事に現わされている。出て来る結果は、この宇宙の機構に存するかと思はれる主義の観念に対する絶望である。軍隊の撤退に際して、憲兵が勝手に数人の将校をひき抜いて射殺してしまうのと同じく、この二人の主人公はあらゆる危険と困難とを克服したかのように思はれる終局に於いて、彼の祈りにもかかわらず女の主人公は死んでしまうわけである。このような態度から 'The Sun Also Rises' に見られる露骨な cynicism に帰ることが、さほど遠いものとは思はれないのである。

4. ヘミングウェイの否定的肯定

後に帰るのではなく、前に進み出た方がはるかに価値がある。ヘミングウェイの態度に注目すべき変化が現われ出したのは、30年代の中頃と言われる。それは必ずしも彼自身が初期の段階のテーマから離脱してしまったと言うのではなく、彼の作品の雰囲気にはっきりと影響を与える一つの新しい要素と言われるものは、人間関係に於ける貞節と忠誠のもつ深い意味、言いかえれば、団結の価値を発見したことであり、それを悟ったと言う事であろう。この事はとるにたらぬように見えるかも知れないのであるが、人間の根本的欲望に対する誠実という原理と相並んで、この事が、生命力と破壊とからなるヘミングウェイ的世界の唯一の価値である。"No matter how a man alone ain't got no bloody fucking chance." He shut his eyes. It had taken him a long time to get it out and

it had taken him all of his life to learn ¹¹⁾ it. (「どうあろうと、一人ぼっちじゃ、まるっ切り勝ち目なんて、ねえぞ」彼は目を閉じた。これを見つげ出すには長い間かかったのだし、これを悟るには彼の全生命が必要だったのだ。)とは **'To Have and Have Not'** の主人公が息をひきとる直前に吐いた言葉である。そしてこの言葉が否定の形でなされていても、それに続く彼は、それを知るのに全生涯をかけてきたのであったし、彼は二人にそれを語ったのに、彼等の方で聞いていなかった。(Harry Morgan looked at him but did not answer. He had told them, but they had not heard. ¹²⁾ という言葉は、作者がその問題について、いかに切実に感じているかと言うことに何の疑念をも残さない。

'To Have and Have Not' の主人公が宿命的に犯罪行為にまきこまれ、止むを得ぬ場合には、殺人を犯すのにも躊躇しないと言う事は、恐らく驚くには及ばないであろうけれども、少くとも彼は自分よりはるかに強力な環境によって、それに押しやられたのであって、しかも妻子に対する彼の忠誠は、彼をとりまいてる墮落によって少しく汚損されることのない価値として残るのである。この種の忠誠は元来ヘミングウェイ作品に於いては殆んど目新しいものであり、ある意味に於いては、主人公が苦痛の瞬間に悟る団結についてのより広い観念を予想出来るのである。同じような状態に置かれて、主人公がかつてない程痛切に自分の創作力を意識にのぼせる **'The Snow of Kilimanjaro'** との類似点に到達する。

ここに於いても又、激しい興奮と残酷の世界に於ける死と暴力による死が、団結による協力の明白な必要性を適切に表現されている。他の登場人物等は、主人公によってブツブツ呟やかれるこの言葉の重要性を理解しないという事実は、人間が信念をもった自分を見出す場合の本質的な孤独のもう一つのシンボルである。ヘミングウェイは一度新しい価値を受入れると、著しく特徴的にそれを実践に移した。スペインの内乱に際して、共和党派について、野戦病院で働いたという事はこの新しい態度を示すに充分

知られた一つの証拠である。

戦争には、生きているという高揚された知覚を伴う純粋に冒険的な魅力があって、それが相当の役割をヘミングウェイの決定に演じているかも知れない。がしかし一つの主義、既に一定の価値に対する信念を自己に結びつけている人のみがよく自分の生命をそれにかけるものだと言うことは、同様に確かである。はるかに大きな枠に入れて見た場合、ヘミングウェイの 'For Whom The Bell Tolls' のテーマの中核をなしている。この題名は John Doune (1573~1631) の 'Devotions Upon Emergent Occasions, 1626' (危機に臨んで) から抜いたものであると言われているが、題名そのものが、この小説の主要概念をよく証明しているものである。Well, we had all our luck in four days.¹³⁾ (とにかく、おれたちはこの四日間に、すべての幸福を味わいつくしたんだ。)とスペインの政府軍に志願したアメリカ人が、新しい攻撃の開始時刻に合わせて、敵前戦の背後にある橋梁爆破の任にあたる四日間に、事件と活動が信じられないほどの展開を見せる。彼は爆破には成功するのであるが死んでしまう。確かにここには初期の作品のテーマに見出せなかった新しい何ものかが存在している。それは主人公の死の意味と、彼の行為に結びついた希望との間に存する新しい調和である。行為の性質は相変らず古い秩序のもの、既に破壊のそれであるが、義務と団結の主張に対する信念から生まれたものであり、明快な主義の為になされるものなのである。

このような信念が、まったく明白な形で描写されている故に肯定するのではなく、依然として、いろいろの要素がからみ合って、それを見ると、従来の懐疑思想が存在し、それが火花のようなこの新しい希望に、いかに強硬に抵抗しているかが理解出来るのである。

例えば、頭脳も優れ、複雑な性格をもっているが全く信頼がなく、時とすると人も殺しかねない人間が、結局は物語の主人公ロバート・ジョーダンを助けはするが、それも手下との私怨を解消する為にしかすぎないパブロ

と言う不将者もその現われと解される。

又重要な地位にある軍人でありながら、恐ろしいほどの愚かさと偏狭さを示すのもそうである。又同じ陣営にありながら互いに反目しあういろいろな党派の深い不信もそのあらわれである。内乱に演じられる恐ろしいほどの恐怖、のしかかってくる不幸の予感、ことに空しい結果に終るものでないと知っていても、しかも多くの人命を犠牲にしてしまうような攻撃をしかけなければならない無益さの思いなども前者と同じく解されるものである。がしかし、そうしたことにもかかわらず、依然としてヘミングウェイの見出した新しい価値に有利なように全体のバランスが保たれている。更に主人公の仲間に加わる一部の男女の示す完全な信頼性、最後の一人まで戦う一群の兵士の狂熱的な抵抗、敵戦線を突破していく伝令の勇気と忍耐、それらはすべて環境よりも強いものである団結というテーマの変形であると見られる。敵の手に落ち、ひどい辱しめを受け、主人公の若いアメリカ人と共に過すことに数時間の幸福を見出す娘に対しての愛情すらも、たとえその愛情がとくに赤裸々な肉体的なものにあるとしても、同様な要素の一つのあらわれであるとも見てよいだろう。この様な新しいものの見方と相並んで、そこに又、主人公に対する思索的内省の分量が増して来るものである。初期の作品に見られる登場人物と違って、ロバート・ジョーダン^{Robert Jordan}は、瞬間の印象を過去の思い出と結びつけるだけでなく、自分に起ってくる事件と、自分が下す決断との意味を理解しようと務めるのである。この事についてのクライマックスは、彼が橋梁爆破の最後の準備を整え、それに成功して、その後に致命的な傷を受けるが、その最後の場面、時間の移行についての描写の中で見出される。彼は自分の学びとったことを伝える方法を願望する。自分が立派な人生を送ったと考え、*I have fought for what I believed in for a year now. If we win here we will win everywhere. The world is a fine place and worth the fighting for and I hate very much to leave it. And you had a lot of luck, he*

told himself, to have had such a good life. You've had just as good a life as grandfather's though not as long. You've had as good a life as any one because of these last days. You do not want to complain when you have been so lucky. I wish there was some way to pass on what I've learned, though. Christ, I was learning fast there at the end.¹⁴⁾ (これで自分の信じるもののために一年間戦ったことになる。

もしここで勝利を獲得するなら、われわれは、いたるところで勝利を得るだろう。この世界は美しいところであり、そのために戦うに値するものであり、そしておれは、この世界を去ることを心からいやだと思う。そしておまえは幸福者だ、と彼は自分に言ってきかせた。こんなにいい生涯をおくることができたのだから。おじいさんの一生ほどながくはないが、おじいさんに負けないくらいりっぱな一生がおくれた。この最後の数日のゆえに、おまえはだれにも負けぬりっぱな生涯を持つことができたのだ。こんな幸運を手にいれながら不平を言いたいとは、おまえだって思うまい。だが、なんとかして自分の学んだことを人々に伝えたいもんだ。畜生、おれは死にぎわになってから大急ぎでそれを学んだ。) と思うのである。

しかし恋人マリアの一部と化しているのだと言う事を相手に向かって言いかけた事を信じようと意識的に努力しなければならないという事実深い重要な意味が含まれている。一方に於いては、死と破壊の確実性、他方に於いては誠実と団結の価値、この二つのもののバランスが最後の章まで保たれているのである。しかもヘミングウェイは主人公に、Do you believe in the possibility of a man seeing ahead what is to happen to him?¹⁵⁾ (人間は自分の身の上に何が起るか、そうなる前にわかるものだろうか？おまえさんはわかると信じるかい？) とか Each one does what he can. You can do nothing for yourself but perhaps you can do something for another.¹⁶⁾ (だれもみな、できることだけをするのだ。おまえはおまえ自身のためには何もできないが、他人のために何かしてやる

ことは、おそらくできるだろう。)と言わしめ事に非常に意味深いものを感じさせられるのである。

‘Across the River and Into the Trees.’などは初期の幻滅的な人生態度への退歩のように思はれる。‘A Farewell to Arms’は第二次世界大戦のアメリカ人の大佐がイタリヤ娘と恋におち、ベニスの近辺の湖沼地帯で鴨うちをしたあと、心臓マヒで死ぬと言う物語である。従ってその構成は死と恋、回想としての戦争と狩猟という、ありきたりなテーマから成っている。この小説をそれ以前のものと区別するものは、死の予感にうかがわれるあきらめの思い、ある戦争経験についての勇敢に耐えしのんだ苦しみの情、中年男と若い女との間の恋愛関係の描写にあらわれた、ためらいがちな筆致の易しき、そうしたものの奇妙な調和にある。実際この関係は、一つの容認された価値にとって代るものであり、幻滅した一大佐をして自分の生涯の事件の意味を理解しようときせるものである。

5. おわりに

価値の問題と経験、並びに行為と価値との関係に対するヘミングウェイの一貫した探求は、彼の物語や小説の主要な特色である。

作家が全経験に関心をおくのであれば、問題はこの経験がわれわれの希望、もしくは人類の現状によせるわれわれの願望を反映しているか否かと言うことでなく、むしろ何等かの形でそれが重要なリアリティーを扱っているか否かということである。

仮りにヘミングウェイの道徳的ビジョンが薄弱だとするならば、それはその時代の本当に重要でないリアリティーをめぐっているからそうなのであって、決して否定的、悲観論的であるが故にそうなのではない。ヘミングウェイの道徳的軌範は、一定の時代と社会の特殊な方面にだけしっくりすると言うことを認識する事が大切である。例えば、家族生活が主題と

なっている場合、その道徳がどんなにしっくりしないかと言うことを思うべきであると言う見解はヘミングウェイの道徳観の本当の方向を否認することになる。物語や小説は、その意味を本当に解釈することなしに、近代人の中心的な道徳問題に関連させて読むことが出来るからである。彼の道徳感の方向は、専らロースト・ジェネレーションの置かれた立場にだけ限定されているのではなく、科学的発見と科学的態度の重圧のもとに、伝統的な19世紀の価値感が崩壊したことから起る全問題をめぐっているのである。

19世紀の科学は懐疑主義を受け入れる基礎と、経験主義的方法による価値の問題に対する新しい態度をもち出すことによって、古い価値の破壊を促進した。これらの原理とヘミングウェイの作品に於ける道徳観との密接つながりを知ることは重要なものである。

彼の主人公の倫理的態度は一方に於いては、深い道徳的懐疑主義に基づいており、他方に於いては、価値決定の問題に対する厳密に経験的な方法の効力に対する確信に基づいているからである。人生に対するこの態度は、ヘミングウェイによって描かれる兵士、猟人、国外逃亡者の経験に十分に現われているだけでなく、近代社会全体の道徳問題を限りなく紛糾させている。ヘミングウェイの小説はこのように、直接的に、なまなましく現代の性格を反映しているものなのである。

- 注 1) The First 49 Stories, Jonathan Cape, P80.
2) *ibid.*, P82.
3) *ibid.*, P60.
4) *ibid.*, P55.
5) *ibid.*, P66.
6) *ibid.*, P56.
7) *ibid.*, P64.
8) *ibid.*, P71.
9) *ibid.*, P50.
10) A Farewell to Arms. Scribners, SL, 61, P249.

- 11) To Have and Have Not. Scribners, SL, 132, P225.
- 12) *ibid.*, P225.
- 13) For Whom the Bell Tolls. Scribners, SL, 4, P466.
- 14) *ibid.*, P467.
- 15) *ibid.*, P250.
- 16) *ibid.*, P466.

尚、本稿に引用した訳文は、すべて三笠書房版ヘミングウェイ全集
(第1巻～第8巻1974年)の訳による。